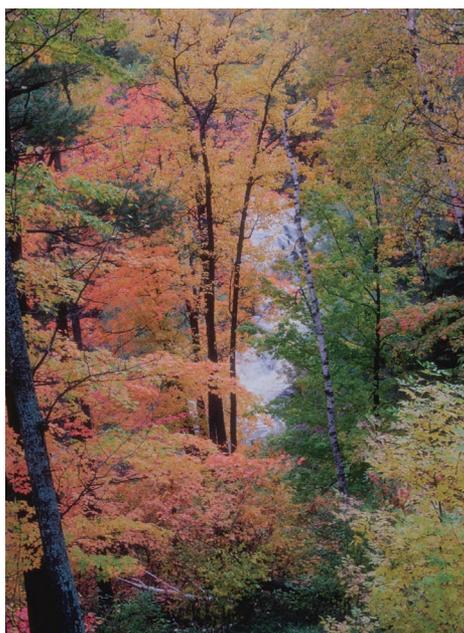


# 永遠の真理

ETERNAL TRUTH



2020年 10月

「闘争と勇氣」「心霊術—それは何か? (1)」「どのように聖靈による一致が実現するか?」「さつまいもの煮物 (レモン風味)」

# 永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

## 目次

### 今月の聖書勉強

心霊術—それは何か? (I) 4

聖書の教え

### 朝のマナ

闘争と勇氣 7

Conflict and Courage

### 現代の真理

「どのように聖霊による一致が実現するか?」 40

わたしたちが信仰の一致に到達するまで

### 力を得るための食事

「さつまいもの煮物(レモン風味)」 44

レシピ

### お話コーナー

「行って、わたしの弟子たちに伝えなさい(I)」 46

イエスの物語

#### 【正丸教会】

〒368-0071 埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1  
電話：0494-22-0465

#### 【高知集会所】

〒780-8015 高知県高知市百石町 1-17-2  
電話：088-831-9535

#### 【沖縄集会所】

〒905-2261 沖縄県名護市天仁屋 600-21  
電話：0980-55-8136

アクセス [www.4angels.jp](http://www.4angels.jp)

メール [sdarm.shomaru@gmail.com](mailto:sdarm.shomaru@gmail.com)

発行日 2020年9月6日

編集&発行 SDA改革運動日本ミッション

〒368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: Getty Image on Front page; Sermon View  
on page 44

## ただ一つの条件

人間の自由が可能であるただ一つの条件は、キリストと一つになることである。「真理は、あなたがたに自由を得させるであろう」とあるが、キリストがその真理である(ヨハネ 8:32)。…神に屈服することは、自分自身を回復すること、すなわち人間の真の栄光と威厳とを回復することである。…

アブラハムの子孫ということは、…品性が似ていることで証明された。…

アブラハムは、約束の救い主を見たいと非常に望んでいた。彼は、自分が死ぬ前にメシヤを見ることができるようにと最も熱心な祈りを捧げた。そして彼はキリストを見た。超自然の光が彼に与えられ、彼は、キリストのきよいご品性を認めた。彼はキリストの日を見、そして喜んだ。彼は、罪のための天来の犠牲を見せられた。この犠牲について、彼は自分の経験を通して実例を与えられていた。「あなたの子、あなたの愛するひとり子イサクを連れて、彼を燔祭としてささげなさい」との命令が彼に与えられた(創世記 22:2)。彼は犠牲の祭壇に、約束の息子、一彼の望みの中心であった息子をおいた。それから、神に従うために、ナイフを振り上げて祭壇の脇に待っていると、「わらべを手にかけてはならない。また何も彼にしてはならない。あなたの子、あなたのひとり子をさえ、わたしのために惜しまないので、あなたが神を恐れる者であることをわたしは今知った」という天の声を彼は聞いた(創世記 22:12)。この恐ろしい苦しみがアブラハムに負わされたのは、彼に、キリストの日を見させ、この世に対する神の愛、すなわちこの世を墮落から引き上げるためにひとり子を非常に屈辱的な死に渡されたほどの神の大いなる愛を認めさせるためであった。

アブラハムは、神について、かつて人間に与えられた最高の教訓を学んだ。死ぬ前にキリストを見たいという彼の祈りは答えられた。彼はキリストを見た。彼は、人間が見ても生きることのできる全部を見たのである。全面的に屈服することによって、彼は自分に与えられたキリストの幻を理解することができた。神は罪人を永遠の滅びから救うためにひとり子をお与えになることによって、人間がなし得るよりもっと大きな、そしてもっとすばらしい犠牲を払おうとしておられるのだということ、彼は示された。…

アブラハムは、自分自身の苦難を通して、救い主の犠牲の使命を見ることができた。だがイスラエルは、彼らの高慢な心にとって面白くないことを理解しようとしなかった。…(各時代の希望中巻 256-261)

## 第19課 心霊術—それは何か? (I)

### 霊的な世界

人間と対話をする霊が存在することを否定する人はほとんどいません。そのことを否定する人々は、事実を調べるなら、超自然的な存在がいるということを見いださずにはいられません。これらの神秘的な存在によって、偉大な奇跡が行われてきましたし、今も行われています。霊的な媒体を通して、時にはある災害が起こるであろうと旅行者に席を予約すべきどうかを助言するメッセージを受信したり、あるいはある奇跡的な様子が幾千もの見物人の注意を引いたりします。しばしばそのような様子には、何らかの宗教的な性質があります。愛する人が亡くなって悲しんでいる多くの人々は、心霊術の薄暗がりの中で慰めを求めます。そこでは媒介者が命じると、別れていた人の霊が現われるように見えるのです。それは彼らにとって愛しい人と同じ声で語り、同じ様子に見えます。心霊術者の主張は正しいのでしょうか。そのような姿をしている存在は、死んだ人の霊なのでしょう。彼らは良い存在だろうか、または悪い存在だろうか?この点について聖書は沈黙をしてはなりません。ですから、この点については、神の御言葉を聞いてみましょう。

### これらの霊は何ものか?

わたしたちは10課ですでに、二種類の霊、すなわち良い霊と悪い霊が存在することを学びました。「御使たちはすべて仕える霊であって、救を受け継ぐべき人々に奉仕するため、つかわされたものではないか。」(ヘブル1:14)。

「これらは、しるしを行う悪霊の霊であって」(黙示録16:14上句)。

しかし、生きている人々からは離れた人々の存在について、わたしたちはどのようにすれば説明することができるのでしょうか?18課では死んだ人々には全く意識がなく、彼らは地上における出来事について何らかかわりをもたないことについて学びました。「生きている者は死ぬべき事を知っている。しかし死者は何

事をも知らない、また、もはや報いを受けることもない。その記憶に残る事がらさえも、ついに忘れられる。その愛も、憎しみも、ねたみも、すでに消えうせて、彼らはもはや日の下に行われるすべての事に、永久にかかわることがない。」(伝道の書 9:5,6)。

ですから、心霊術によって霊媒者が通信している霊は、その霊や彼らと通信している人々によって主張されているように、死んだ人々の霊ではありません。また、そのような霊は、墮落していない天使でもありません。なぜなら、その霊は、死んだ人の霊であるかのように振る舞うことによって人々を欺こうとしているからです。神の聖天使たちは、決して人を欺くことはしません。

そのため、結論は一つしかありません。心霊術的な媒体を通じてメッセージを送る霊は、悪魔の霊です。彼らは自分たちの主人であるサタンの指揮下にあります。サタンは、あらゆる手段を用いて人々をだまし、特にこの最後の時代に、彼らが失われるように仕向けています。

「身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししののように、食いつくすべきものを求めて歩き回っている。」(ペテロ第一 5:8)。

「この巨大な龍、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれ、全世界を惑わす年を経たへびは、地に投げ落され、その使たちも、もろともに投げ落された。」(黙示録 12:9)。

## 明らかにされた霊たち

この欺瞞に関して、わたしたちは闇の中に取り残されてはいません。聖書は、これらの悪霊がどのように人々をだまそうとするかその手段について明確に示しています。多くの人々は、心霊術を単なる人間の欺瞞だと信じています。しかし、彼らが実際に人間を超えた存在と直面するとき、彼らはその存在が超自然的なものであると認めざるを得ません。そのため、彼らはだまされてしまうのです。

使徒パウロは、キリストの再臨の前に、サタンの力が様々なかたちで表されることについて警告しています。主の来臨の前に次のようなことが生じる。「不法の者が来るのは、サタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力と、しるしと、不思議と、また、あらゆる不義の惑わしとを、滅ぶべき者どもに対して行うためである。彼らが滅びるのは、自分らの救となるべき真理に対する愛を受けいれな

った報いである。」(テサロニケ第二 2:9,10)。

使徒ヨハネも同様に、次のように宣言しています。「また、大いなるしるしを行って、人々の前で火を天から地に降らせることさえた。さらに、先の獣の前で行うのを許されたしるしで、地に住む人々を惑わし、…。」(黙示録 13:13,14)。

これらのサタンの使たちが行う奇跡は現実であり、多くの人々がそれらによってだまされてしまいます。心霊術の偽りの主張に対する唯一の防御手段は、聖書です。神は、罨を発見するために十分な光を与えてくれました。

### 終わりの時代の心霊術

キリストの再臨の直前である今日において、古代の魔術が大いに復活することが聖書で預言されています。「しかし、御霊は明らかに告げて言う。後の時になると、ある人々は、惑わす霊と悪霊の教とに気をとられて、信仰から離れ去るであろう」(テモテ第一 4:1)。

この記載は、いつ悪霊がその最大の欺瞞の働きを演出するかを教えてください。彼らの影響は、誘惑的であり、また破壊的です。なぜなら、彼らは、自分たちを信じる者たちを「信仰」から離れるように導くからです。キリストの再臨の前に、かつてないほどの大規模な背教が教会の中で現われるでしょう。「だれがどんな事をして、それにだまされてはならない。まず背教のことが起り、不法の者、すなわち、滅びの子が現れるにちがいない。...その時になると、不法の者が現れる。この者を、主イエスは口の息をもって殺し、来臨の輝きによって滅ぼすであろう。不法の者が来るのは、サタンの働きによるのであって、あらゆる偽りの力と、しるしと、不思議と、また、あらゆる不義の惑わしとを、滅ぶべき者どもに対して行うためである。彼らが滅びるのは、自分らの救となるべき真理に対する愛を受けられなかった報いである」(テサロニケ第二 2:3,8-10)。

この終わりの時代において、魔術は近代的な方法で持ち込まれているでしょうか?近代的な人たちの心霊術は、ニューヨークのハイズビルという村に住んでいたフォックス家で始まりました。1848年3月31日の夜、マーガレットとケイティーは、奇妙なラップ音により起こされました。その音は、家中で聞こえました。

その子どもたちは、彼らの手によってそのラップ音をまねました。ケイティーは、次のように言いました。「ミスター、スプリットフット(裂足氏)、わたしと同じようにやっごらん」。手をたたくごとに、それに答えてラップ音が聞こえました。彼

女は、それから自分の指をあげて、一毎回違う数を一スプリットフットに数を言うように尋ねると、毎回正しい数のラップ音が返ってきました。彼らはラップ音の原因が知性のあるものであることがわかりました。この始まりから、この二人の姉妹は、霊たちの代理人となり、近代の心霊術へと導いていきました。19世紀末までに、心霊術は憂慮すべき早さで世界中に広まり、最近では心霊術が自らを教会だと宣言してきました。

最後の大欺瞞のために、舞台が整えられています。この世は、心霊術を本物の宗教として受け入れてきました。それは、ほとんどの教派の教会に感化を与えてきました。まもなく大欺瞞者サタンは、自分の最大の心霊術の表れを演出するでしょう。「こういう人々にはせ使徒、人をだます働き人であって、キリストの使徒に擬装しているにすぎないからである。しかし、驚くには及ばない。サタンも光の天使に擬装するのだから。だから、たといサタンの手下どもが、義の奉仕者のように擬装したとしても、不思議ではない。彼らの最期は、そのしわざに合ったものとなろう」(コリント第二 11:13-15)。

# 闘争と勇気

*Conflict and Courage*



10月

## きて見なさい

「このピリポがナタナエルに出会って言った、『わたしたちは、モーセが律法の中にするしており、預言者たちがしるしていた人、ヨセフの子、ナザレのイエスにいま出会った。』」（ヨハネ 1:45）

ピリポがナタナエルを呼んだ時、……

もしナタナエルがラビの指導を信頼していたら、彼は決してイエスをみいださなかったであろう。彼は自分で見、自分で判断して、弟子となった。今日偏見にとられて恵みから遠ざかっている多くの人々の場合も同じである。もし彼らがきて見さしたら、その結果はどんなに異なったものになるだろう。……

ナタナエルのように、われわれは神のみことばを自分で研究し、聖霊の光を求めて祈る必要がある。いちじくの木の下でのナタナエルをごらんになったお方は、かくれた祈りの場所にいるわれわれをごらんになる。光の国の天使たちは、へりくだって天の導きを求める者の近くにいる。

ヨハネとアンデレとシモン、またピリポとナタナエルの召しによって、キリスト教会の基礎が置かれた。バプテスマのヨハネは自分の2人の弟子をキリストに導いた。その中の1人アンデレは自分の兄弟を見つけて救い主のもとへ呼んだ。それからピリポが呼ばれ、ピリポはナタナエルをさがしに行った。このような模範は、個人的な努力、すなわち肉親や友人や隣人に直接訴えることの重要性をわれわれに教えねばならない。……

愛に満ちたクリスチャンの心からの奉仕を必要としている人々がたくさんいる。もし普通の男女である隣人たちが個人的な努力をしていたら救われたかもしれない人々がたくさん減ってしまった。多くの人々は個人的に語りかけられるのを待っている。われわれの住んでいる家庭の中に、隣近所に、町に、キリストの伝道者としてわれわれのなすべき働きがある。われわれがクリスチャンなら、この働きは楽しみとなるであろう。人は信仰を持つとすぐ、自分がイエスというとうとい友をみだしたことを他人に知らせたいという願いが心の中に生ずる。人を救いきよめる真理を、心の中にとじこめておくことはできないのである。……

イエスが昇天されたいまは、弟子たちが人々の中にあつてキリストの代表者である。だから魂をキリストに導く最も効果的な方法は、キリストの品性をわれわれの日常生活にあらわすことである。……キリストの柔和が目立っている矛盾のない生活は世における一つの力である。（各時代の希望上巻 158 - 162）

10月2日

## イチジクの木の下で

「イエスはナタナエルが自分の方に来るのを見て、彼について言われた、『見よ、あの人こそ、ほんとうのイスラエル人である。その心には偽りがない。』」(ヨハネ 1:47)

ナタナエルはヨハネが救い主を指して、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」と言ったのを聞いていた(ヨハネ 1:29)。ナタナエルはイエスを見たが、世の贖い主の外観に失望した。苦勞と貧乏のしるしの現われているこの人が本当にメシヤであろうか。イエスは労働者階級の人であり、質素な職人たちと共に額に汗して働かれたのであった。そしてナタナエルは去って行った。しかし彼はイエスがどのようなお方であるかについては自分の考えを決めてはいなかった。このお方が本当にメシヤかどうかと神に問いつつ、彼はイチジクの木の下にひざまずいた。ナタナエルがその場にいる間に、ピリポがやってきて、「わたしたちはモーセが律法の中に記しており、預言者たちが記していた人、ヨセフの子ナザレのイエスに今出会った」と言った。しかし「ナザレ」という言葉が再び彼の不信をかきたて、「ナザレから何のよいものが出ようか」とナタナエルは言ったのである。彼は偏見に満たされていたが、ピリポは彼の偏見に立ち向かおうとはしないで、ただ「きて見なさい」と言った。……

何が真理であるかについて神に尋ね求めるために、イチジクの木の下に行くのはわたしたちにとって良いことではないだろうか。神の御目がナタナエルの上に注がれていたように、わたしたちの上にも注がれないだろうか。ナタナエルは主を信じて「先生、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です」と叫んだ。(ヘゲド・メッセジ 1巻 414, 415)

ナタナエルの不信は一掃され、堅固で力強い不変の信仰が彼の魂をとらえた。イエスはナタナエルの信頼に満ちた信仰を誉められた。

ナタナエルと同じような状況のもとにいる人々がたくさんいる。彼らはこの終わりの時代の特別な真理やこの真理を持っている人々に接したことがないので偏見と不信を持っている。だから彼らの不信を一掃するためにキリストの御霊の臨在が要求される。わたしたちは天に根ざす真理から、魂をそらそうとするどのような努力や反対にあったとしても、自分の信仰を公にしなければならぬ。正直な魂が見て、聞いて、自分自身のために確信することができるためである。わたしたちの働きは、ピリポがしたように「きて見なさい」というものでなければならない。わたしたちは隠したいと思うような教理をもってははいないのである。(教会への証 6巻 37, 38)

## キリストへの弟子入り

「イエスは彼らに言われた、『わたしについてきなさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう』。すると、彼らはすぐに網を捨てて、イエスに従った。」(マルコ 1:17, 18)

このガリラヤの漁師たちは、いやしい、無学な人たちであった。しかし世の光であられるキリストは、彼らをその選ばれた立場にふさわしい資格のある者となさることが十分おできになった。救い主は教育を軽んじられなかった。なぜなら神の愛に支配され、神の奉仕に献身する時、知的な教養は一つの祝福であるからだ。しかしイエスは当時の賢人たちをみすごされた。それは彼らが自信が強すぎて、悩んでいる人類に同情することができずナザレの人イエスの共労者となることができなかつたからである。偏狭な彼らはキリストから教えられることを軽蔑した。主イエスは、主の恵みを伝えるのにさまたげるもののない水路となる人々の協力をお求めになる。……

イエスは無学な漁師たちをお選びになったが、それは彼らが当時の言い伝えやまちがった慣習によって教育されていなかったからである。彼らは生れつき才能を持った人たちで、謙遜で教えやすく、キリストがご自分の働きのために教育なさることのできる人たちであった。世の一般の人たちの中には、もしその能力が呼びさまされて活動するならば、世の中の最も尊敬されている人々と同等の立場まで高められるのに、そうした能力を持っていることに気がつかないで、日々の骨折り仕事を根気よくくりかえしている人々がたくさんいる。このような眠っている才能が目覚めるにはじょうずに接せられることが必要である。イエスがご自分の共労者とするために召されたのはこういう人たちであった。こうしてイエスは、彼らにご自分とまじわる特権をお与えになった。世のえらい人たちは決してこのような教師をもたなかつた。弟子たちが救い主の訓練を受けた時、彼らはもはや無知でも無教養でもなかつた。彼らは頭も品性もイエスのようになり、世の人々は彼らがイエスと共にいた者であることを知った。(各時代の希望上巻 309, 310)

ガリラヤの漁師をお召しになったイエスは、いまもなお人々をご自分の奉仕に召しておられる。しかもイエスは、最初の弟子たちを通して力をあらわされたのと同じに、われわれを通してよるこんで力をあらわされる。われわれがどんなに不完全で罪深い者であろうと、主はわれわれに、キリストとの共同者、キリストに見習う者となるようにとの招きを提供しておられる。キリストと一つになって神のみわざに働くことができるように、神の教えを受けなさいと、主はわれわれを招いておられる。(同上 384)

10月4日

## わたしについてきなさい

「そののち、イエスが出て行かれると、レビという名の取税人が取税所にすわっているのを見て、『わたしに従ってきなさい』と言われた。すると、彼はいっさいを捨てて立ちあがり、イエスに従ってきた。」(ルカ 5:27, 28)

パレスチナのローマ官吏の中で、取税人ほど憎まれた者はなかった。外国の権力によって税を課せられるということが、自国の独立権が失われたことをユダヤ人に思い出させ、たえず彼らを怒らせた。取税人は……自分自身のために強奪者となり、民を犠牲にして私腹を肥やした。ローマ人の手からこの任命を受けたユダヤ人は、国民の名誉を裏切る者とみなされた。彼は変節者として軽蔑され、社会の最も下等な階層に入れられた。

レビ・マタイはこの階級に属していたが、彼はゲネサレでの4人の弟子たちの次に、キリストの奉仕に召された。パリサイ人はマタイをその職業から判断していたが、イエスはこの男のうちに真理を受け入れるために心が開かれているのをごらんになった。マタイは救い主の教えを聞いていた。罪をさとらせる神のみたまが彼の罪深さを示した時、彼はキリストの助けを求めたいと熱望した。だが彼は、ラビたちの排他心になれていたので、この大教師イエスが自分に注目されるだろうとは考えていなかった。

ある日、この取税人が取税所にすわっていると、イエスが近づいてこられるのが見えた。「わたしに従ってきなさい」ということばが自分に向かって語られるのを聞いた時の彼の驚きは大きかった。

マタイは、「いっさいを捨てて立ちあがり、イエスに従ってきた」(ルカ 5:27, 28)。ちゅうちょもなく、質問もせず金もうけの商売が貧乏と苦勞にとり代えられるという考えもなかった。イエスといっしょにいるということ、イエスのみことばをきき、イエスの働きに加われるということだけで彼は十分だった。……

金持ちだったマタイにも、貧乏だったアンデレとペテロにも、同じ試みが与えられたが、彼らはそれぞれ同じように献身した。成功の瞬間に、すなわち、網が魚でいっぱいになり、これまで通りの生活をつづけたいという気持が最も強かった時に、イエスは、海辺で、弟子たちに福音の働きのために一切を捨てるように求められた。同じように一人一人の魂は、この世の幸福を望む心と、キリストとのまじわりを望む心と、そのどちらが最も強いかを試みられるのである。(各時代の希望上巻 344, 345)

## 締め出されてはいない取税人

「わたしはいつくしみを喜び、犠牲を喜ばない。燔祭よりもむしろ神を知ること  
を喜ぶ。」(ホセア 6:6)

マタイがキリストの弟子の一人として召されたことから非常な憤慨が引き起こされた。宗教教師が、直弟子の一人として取税人を選ぶということは、宗教的、社会的、国民的な慣例に反していた。(各時代の希望上巻 346)

感謝の念から、マタイは自分に与えられた名誉をありがたく思う気持ちを表したいと願った。そこで彼は自分の仕事や遊びやまた罪を共に犯した仲間であった人々に声をかけて、救い主のためにふるまいの席を設けた。イエスが自分のように罪深く価値のない者を召してくださるのであれば、自分よりは、はるかに価値のある以前の仲間を必ず受け入れてくださるに違いないとマタイは考えた。彼は、この人々がキリストのあわれみと恵みの恩恵を分け合うようにという切なる願いを抱いていた。キリストが取税人や罪びとを軽蔑したり憎んだり……なさらないことを彼らに知らせたいと願った。キリストを祝福に満ちた救い主として彼らに知らせたいと望んだのであった。……

イエスはそのようなふるまいの席への招待を決して拒まれなかった。いつもご自分の前にある目的は、聞く者の心に真理の種、すなわちご自身に魂を引き寄せるために人を引き付ける会話を通して真理の種をまくことであつた。ご自分のあらゆる行動に、キリストは目的を持っておられたので、この場合にお与えになった教訓はおりにかなった適切なものであつた。この行為によってキリストは、取税人や罪人であってもご自分の臨在から締め出されはしないことを宣言されたのである。……

パリサイ人はキリストが取税人や罪人と食を共にしておられるのを見た。……他からの助けが必要とは思っていない自分を正しいと思っていたこの人たちは、キリストの働きを正しく評価することができなかつた。彼らは、キリストがもたらすためにこられたその救いを受けることができない場所に自分を置いた。彼らは生命を受けることのできるお方のところへ来ようとしなつたのである。あわれな取税人や罪人は助けの必要を感じたので、キリストが自分たちに与えることができになると知っていた教えと救いを受け入れた。(サイン・オブ・ザ・タイムズ 1898年6月23日)

マタイ自身にとってふるまいの席でのイエスの模範はいつも教訓となつていた。軽蔑されていたこの取税人はもつとも献身的な伝道者の一人となり、彼自身の伝道において主のみ足跡に忠実に従つた。(各時代の希望上巻 348)

10月6日

## ユダ、身勝手な弟子

「『しかし、あなたがたの中には信じない者がいる』。イエスは、初めから、だれが信じないか、また、だれが彼を裏切るかを知っておられたのである。」(ヨハネ 6:64)

イエスが弟子たちを挨拶のために準備しておられた時、召されていないのに仲間に加わりたいと強要した者があった。それはイスカリオテのユダという男で、自らキリストの弟子と名乗っていた。……ユダは、イエスがメシヤであると信じた。そして使徒たちに加わることによって、新しい王国の高い地位を占めようと望んだ。…

弟子たちは、ぜひユダに仲間の一人になってもらいたいと望んだ。ユダは、堂々たる外見をそなえ、鋭い洞察力と実行力とを持った男だったので、弟子たちは、イエスの働きに大きな助けになる人物として、彼をイエスに推薦した。…

その後のユダの経歴は、神の働きに適する人物かどうかを決定するのに世俗的な考慮を重んじることが、危険であることを弟子たちに示すことになった。…

しかしユダは、弟子となった時、キリストの品性の美しさに気がつかなかったわけではなかった。彼は、魂を救い主にひきよせている神の力の感化力を感じた。…

救い主はユダの心をお読みになり、ユダが神の恵みによって救われなければ不義の深みに沈んでしまうことをご存じだった。この男をご自分に結びつけることによって、イエスは、ご自身のわきあふれる無我の愛に日々ふれることのできることに彼を置かれた。もしユダが心をキリストに向かって開くなら、神の恵みは利己主義という悪鬼を追い出し、たとえユダでも神のみ国の住民となるかもしれない。

もし人々が訓練され、神について学ぶなら、神は彼らを人間的な要素のある品性のままに受け入れて、神のご用のために彼らを養成される。彼らは完全な人間だから選ばれるのではなくて、不完全な人間であるにもかかわらず、真理を知りこれを実行することにより、またキリストの恵みによって、神のみかたちに変えられる者となるために選ばれるのである。

ユダは、ほかの弟子たちと同じように機会が与えられた。彼は、同じとうい教訓を聞いた。しかしキリストが要求された真理の実行は、ユダの心の思いや目的とくいちがっていたので、彼は、神からの知恵をうけるために、自分の考えを放棄しようとしなかった。(各時代の希望上巻 378 - 380)

## 弁解の余地はない

「金銭を愛することは、すべての悪の根である。ある人々は欲ぼって金銭を求めたため、信仰から迷い出て、多くの苦痛をもって自分自身を刺しとおした。」(テモテ第一 6:10)

救い主は、ご自分を売り渡す者となるこの男を、どんなにやさしくとり扱われたことだろう。イエスは、ご自分の教えを通して、貧欲な心を根絶する慈善の原則についてこんこんとさとされた。イエスは、ユダの前に貪欲という憎むべき性格をお示しになった。この弟子は自分の性格が描写され、自分の罪が指摘されているのを幾度も認めたが、自分の不義を告白してこれを捨てようとしなかった。彼は自分に満足していたので、誘惑に抵抗しないで、その不正な行為をつづけた。

...

イエスは、ユダの貪欲を鋭いことばで譴責されないで、開かれた本を読むようにユダの心を読んでおられる証拠を示された時でも、天来の忍耐力をもって、このあやまちを犯している男を忍ばれた。イエスは、彼の前に正しい行為の最高の動機をお示しになった。ユダが天の神の光をしりぞけるなら、彼はもはや弁解の余地がないのである。(各時代の希望上巻 380, 381)

サタンはあらゆる魂に対して生命にかかわるゲームをしている。実際的な思いやりは心の純潔と無我についてのテストであるとサタンは知っているので、彼は他人の必要に対してわたしたちの心を閉ざさせようとする限りの努力をしている。…彼は愛と思いやりを表すのを妨げるものを多くの事柄に用いる。サタンがユダを滅ぼしたのはこのようにしてであった。ユダは絶えず自分を益することを計画し続けた。この点においてユダは今日クリスチャンと自称する多くの人々を代表している。それゆえにわたしたちは彼の例を研究する必要があるのである。わたしたちはユダがキリストに近かったと同じぐらいキリストに近いのである。しかし、もしユダのようにキリストとの交わりがわたしたちをこのお方と一つにしないなら、キリストがご自分の生命をお与えになった人々に対して心からの思いやりがわたしたちの心に培われないなら、わたしたちはユダと同じように危険な状態なのである。

...

わたしたちは正義からはじめの一步が外れることを警戒する必要がある、なぜなら一つの違反、キリストの精神を表すことを一つ無視することは、心が敵の原則に打ち負かされるまで、一つまた一つと道を開くことになるからである。自分本位という精神は培うなら、キリストの力以外は何物も従わせることのできない食いつくす情欲となる。(教会への証 6 巻 364, 365)

10月8日

## 争いの種

「あなたがたの間ではそうであってはならない。かえって、あなたがたの間で偉くなりたと思う者は、仕える人となり、あなたがたの間でかしらになりたと思う者は、僕とならねばならない。」(マタイ 20:26, 27)

ユダによって弟子たちの間に反抗的な要素が持ち込まれた。……彼の心を支配していたものは、キリストがこの世の王国を建設されたとき、その恩恵にあずかろうという利己的な希望であった。ユダはキリストの愛という天来の力を認めながら、しかもその主権に屈服しようとしなかった。彼は心の中に自分の判断と意見をまた人を批評し、非難する傾向を持ち続けた。彼には到底理解できないようなキリストの動機や行動は、彼の疑惑と反抗の念をかきたてた。そして彼の疑惑や野心は、知らず知らずのうちに他の弟子たちへと伝染していった。弟子たちが権力争いをしたり、キリストの方法に不満を持ったりするような原因の大部分は、ユダにあった。(教育 94, 95)

彼は議論と人をまよわせる意見とを持ち込み、学者たちやパリサイ人たちがキリストの主張に反対してとなえる議論をくりかえした。……彼はキリストが述べておられる真理とは何の関係もない聖句をよく持ち出した。こうした聖句は、前後関係を抜きにされると、弟子たちを困惑させ、たえず彼らを襲っている落胆を増し加えた。しかもこうしたことはすべて、自分を良心的にみせるようなやり方でなされた。そして弟子たちが大教師イエスのみことばを確認する証拠をさがしていると、ユダは彼らを気がつかないうちにほかの道へ連れ込むのだった。……

キリストが弟子たちに言われたすべてのことの中には、ユダが心の中で同意できないものがあった。……

しかしユダは公然と反対もしなければ、救い主の教えを問題にする様子もなかった。シモンの家で食事をした時まで、彼は不平を外にもらさなかった。マリヤが救い主の足に油をそそいだ時、ユダはその貪欲な性質をあらわした。イエスから譴責されて、彼の精神はにがい恨みに変わったようであった。傷つけられた誇りと、復讐心とが壁を打ち倒し、長い間ほしいまみにしていた貧欲が彼を支配した。このことはまた罪をいつまでももてあそんでいる人間の経験となる。墮落の要素に抵抗し、これに打ち勝たないならば、それは、サタン誘惑に応じ、その魂はサタンの思いのままにとりことなるのである。(各時代の希望下巻 219 - 221)

## 差異の中での一致

「そこで十二人をお立てになった。彼らを自分のそばに置くためであり、さらに宣教につかわし、」(マルコ 3:14)

これらの最初の弟子たちには、著しい差異がみられた。彼らは、世人の教師となるはずであった。彼らは多方面に異なった性格の型を表していた。弟子たちの中には、それまで税吏として社会的に活動し、ローマへの屈従の生活をしていながら召し出されたレビ人タイ、ローマ帝国の権威に抗して屈しない熱心党のシモン、情けに激しやすく自尊心が強く、しかも暖かい心をもったペテロ、その兄弟アンデレ、教養と才能を持ちながら、反面には卑劣な心の持ち主であったイスカリオテのユダ、忠実で熱心でありながら信じる心の遅いピリポとトマス、同心の兄弟たちの中ではあまり目立った存在ではなかったが、その欠点も美德もはつきりしていた力の人アルパヨの子ヤコブとタダイ、子供のような純真さと信頼心を持ったナタナエル、大きな望みと愛情の心を持ったゼバダイの子たち、といったような人たちがいた。……

12人の弟子たちの中で、四人の者が、それぞれ独自の立場で、主要な役割を演ずることになった。すべてのことを予知なさるキリストはこれに備えて、弟子たちを教育された。剣にかかって早急な死をとげなければならない運命が待っていたヤコブ、兄弟たちの中で最も長い間、主に従って働き迫害を受けたヨハネ、長年の障害を打破して、異教の世界にキリストの教えを説く先駆者となったペテロ、同心の兄弟たちよりも立派な奉仕が可能でありながら、自分でも思いがけない方向へ発展していった意図を心の中に隠していたユダであった。(教育 88, 89)

これらの弟子たちは、生まれつきの性格や、訓練や生活の習慣がそれぞれ非常に異なっていたので、その召された働きを首尾よく進展させるためには、感情においても思想においても行動においても、互いに一致しなければならなかった。この一致を確保することが、キリストの御目的であった。……キリストの働きの重荷は、父なる神に祈られたみ言葉の中によく表現されている。「父よ、それはあなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、みんなの者が一つとなるためであります」(ヨハネ 17:21)。(同上 88)

主の使徒たちの中には、彼らにとってほこりとなるようなものは何もなかった。彼らの働きの成功はただ神のおかげであったことは明らかであった。この人たちの生涯、彼らの築いた品性、彼らを通して神が達成された偉大な御業は素直で従順なすべての者に神がどういうことをしてくださるかということについての証である。(各時代の希望上巻 311)

10月10日

## だれも完全ではなかった

「しかしわたしたちは、この宝を土の器の中に持っている。その測り知れない方は神のものであって、わたしたちから出たものでないことが、あらわれるためである。」(コリント第二 4:7)

イエスが弟子たちをご自分の奉仕に召されたとき、彼らは全部ひどい欠点を持っていた。柔和で心のへりくだったお方と最も親密に交わったヨハネでさえ、生れつき柔和で従順な人間ではなかった。彼とその兄弟は、「雷の子」と呼ばれた。彼らがイエスと一緒にいた時に、イエスに対してだれかが軽蔑でも示そうものなら、彼らは憤慨してけんか腰になるのだった。短気、復讐心、批判の精神といったものがすべてこの愛された弟子のうちにあった。彼は高慢で、神の国では第一位の者になりたいという野心をもっていた。しかし一日一日、自分自身の激しい気性と対照的に、彼は、イエスの柔和と寛容とを見、謙遜と忍耐についてイエスの教訓を聞いた彼は天来の感化に向かって心を開き、救い主のみことばをきく者となるばかりでなく、これを行う者となった。自我はキリストのうちにかくれた。彼はキリストのくびきを負い、キリストの重荷を負うことを学んだ。

イエスは弟子たちをしかり、彼らに警告し、また注意された。しかしヨハネとその兄弟たちは、イエスから離れなかった。彼らは、しかられたにもかかわらずイエスをえらんだ。救い主は、彼らに欠点とまちがいがいるからといって、彼らから離れるようなことをなさらなかった。彼らは、終わりまでイエスと試練を共にし、イエスの生活から教訓を学んだ。キリストを見ることによって、彼らの品性が一変した。

人々の中にあつてキリストを代表する者として、キリストは、全然墮落したことのない天使たちをお選びにならず、救おうとする相手の人間と同じ情を持った人間をお選びになる。……

自分自身が危険の中にあつたために、彼らは道中の危険と困難をよく知っており、そのために彼らは、同じような危険のうちにあるほかの人々に手をさしのべるために召されているのである。疑いに悩み、弱さに苦しみ、信仰弱く、目に見えない神をとらえることのできない魂がいる。しかし彼らの目に見える友人がキリストの代りに彼らのところにやってきて、彼らのふるえている信仰をキリストに固くつなぐ環とすることができる。

われわれは、キリストを世に紹介するのに、天使たちと共に働く者となるのである。(各時代の希望上巻 381 - 384)

## 疑いと質問

「イエスはすぐに彼らに声をかけて、『しっかりするのだ、わたしである。恐れることはない』と言われた。」(マタイ 14:27)

彼ら[弟子たち]は「舟に乗って海を渡り、向こう岸のカペナウムに行きかけた」(ヨハネ 6:17)。彼らは不満な気持でイエスを残してきた。……彼らはイエスを王として宣言することがゆるぎなかったもので、不平を言った。イエスの命令にこんなにたやすく従ったことで自分たちを責めた。

彼らの思いと心は、だんだん不信に占められた、名誉欲が彼らの思いをとりこにした。……キリストは王としての権威を主張されないのだろうか。これほどの力を持ったお方がなぜご自分の真の性格を示して、われわれの道を苦痛のないものにしてくださらないのだろうか。イエスはなぜバプテスマのヨハネを非業の死から救われなかったのだろうか。弟子たちはこのように議論したので、ついには彼ら自身の上に非常な霊的暗黒を招いた。イエスはいったいパリサイ人たちが主張するように詐欺師なのだろうか、と、彼らは質問した。

弟子たちは、その日キリストのふしぎなみわざを目に見ていた。天が地においてきたように思えた。この輝かしく、とうとい日の思い出によって、彼らは信仰と望みに満たされるべきだった。そうしたことについて、心に満ちあふれるままに語り合っていたら、彼らは試みにおちいるようなことはなかったのである。……

彼らの思いもまた荒れて、理性を欠いていたので、主は、彼らの魂を苦しめ、彼らの心を占領するような何かほかのものをお与えになった。人間が自分で重荷と苦勞とをつくり出す時に、神はたびたびそういうことをなさる。……

激しい嵐がしのびよってきていたのに、彼らはそのために備えができていなかった。……彼らは不満も不信もいらだっている気持も忘れた。……明け方の四時になるまで、彼らはほねおって舟をこいだ。それから彼らは疲れ果ててしまってもうだめだとあきらめた。嵐と暗黒の中で、彼ら自身、己の無力さがわかったので、主がいてくださったらと熱望した。

イエスは彼らをお忘れになっていなかった。……

彼らもうだめだと思った瞬間、かすかな光の中に彼らの方へ向かって海の上を近づいてくる一つのふしぎな姿が現われる。……

愛する主はふりかえられ、「しっかりするのだ、わたしである。恐れることはない」とのお声が彼らの恐怖を静める(マタイ 14:27)。(各時代の希望中巻 120 - 123)

10月12日

## 秘密の会見

「わたしたちの行った義のわざによってではなく、ただ神のあわれみによって、再生の洗いを受け、」(テトス 3:5)

ニコデモはユダヤ国民の中で高い信任の地位を占めていた。彼は高い教育を受け、並々ならぬ才能を持ち、また国民議会の名誉ある議員であった。他の人たちと同じに、彼もイエスの教えに心を動かされていた。……

ニコデモはイエスとの面会を非常に望んだが、公然とイエスに会うことをちゅうちよした。……彼は町が眠りのうちに静まるまで待ち、それからイエスをたずねて行った。……

「先生、わたしたちはあなたが神からこられた教師であることを知っています。……彼のことは信頼心をあらわし、また信頼心を起こさせるように意図されていた。だが実際にはそのことばに不信があらわれていた。彼はイエスをメシヤとして認めず、ただ神からつかわされた教師として認めた。……

イエスは、相手の心の奥底を読んでおられるかのように、語り手にじっと目をそそがれた。限らない知恵を持っておられるイエスは、ご自分の目の前に真理を求めている一人の人間をごらんになった。……そこで主は、……まっすぐ中心点にふれ、厳粛に、しかしやさしく言われた、「よくよくあなたに言うておく。だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない」(ヨハネ 3:3)。……

ニコデモは、バプテスマのヨハネが悔い改めとバプテスマについて説き、聖霊をもってバプテスマを授けられるお方を人々にさし示すのを見聞きしていた。……しかしバプテスマのヨハネの鋭いメッセージは、彼の心のうちに罪の自覚を起さなかった。彼は厳格なパリサイ人で、自分の善行を誇っていた。彼は、慈善心と、宮の奉仕を維持するために惜しまず献金することによって世間から尊敬されていたので、神の恵みは確実であると思っていた。彼はみ国が自分の現在の状態では見る事ができないほどきよいものであるという思いに驚かされた。……

彼は、イスラエル人として生れたおかげで、自分は必ず神のみ国に入るものと考えていた。彼は自分が変化する必要があると思わなかった。だから救い主のことばに驚いたのである。彼はこのことばがびったりと自分自身にあてはめられたことにいらだった。パリサイ人としての誇りが真理を求める者としての正直な願いと戦っていた。(各時代の希望上巻 197 - 200)

## 風が吹く時

「イエスは答えられた、『よくよくあなたに言っておく。だれでも、水と霊とから生れなければ、神の国にはいることはできない。』」（ヨハネ 3:5）

ニコデモはこの言葉に憤慨すると同時に驚いた。彼は自分を知的であるばかりでなく、信心深い敬虔な人間であると思っていた。……宗教を構成する事柄について自分の理解とこの改心についての教義を彼は調和させることができなかった。彼は改心の過程を自分自身の満足のいくように説明することができなかった。しかしイエスはニコデモのこの改心は彼が考えている特定の方法では説明することができないことを彼に示された。ニコデモは風を見ることはできないが、風の行為ははっきり見ることができることをイエスは指摘された。彼は改心の過程を説明することはできなくても、その結果をはっきりと見ることはできるのである。彼は思いのままに吹く風の音を聞き、その行為の結果を見ることができた。実際に働く働きは目には見えない。……最高の教育のある人であっても人間の論法は人間の思いと品性に対する聖霊の働きを説明することはできない。しかしその生活と行動に結果を見ることができるのである。……

ニコデモは真理を認めたくなくなった。神の力による実際の働きと関連しているすべてのことを理解することができなかったからである。しかし彼は自然界の事実を説明したり理解さえすることはできなかったが受け入れた。各時代の他の人々のように、彼は宗教に不可欠なものは、御霊の深い感動よりも形式や几帳面な儀式であると思っていた。（ビュー・アソド・ハラド 1896年5月4日）

わたしたちもニコデモのように、自分の生活は正しくて道徳的にも間違っていないとうぬばれ、普通の罪人のように神の前にへりくだる必要はないと考えているかもしれないが、ひとたびキリストからの光が心の中に差し込むとき、自分たちがどんなに汚れているかがわかるのである。また何をすることも自分の利益ばかり考え、神に逆らい、日常のあらゆる行動が汚れていたことを悟るのである。そしてわたしたちの義は汚れた衣のようであって、キリストの血だけが罪の汚れより清め、このお方のみ姿にかたどってわたしたちの心を新たにすることを知るのである。（キリストへの道 32）

10月14日

## 新たに生まれよ

「しかし、真理を行っている者は光に来る。その人のおこないの、神にあってなされたということが、明らかにされるためである。」(ヨハネ 3:21)

ニコデモは、主と議論しようと思ってやってきたのであったが、イエスは真理の根本原則をはっきりとお示しになった。主はニコデモにこう言われた、あなたにとって必要なのは、理論的な知識よりもむしろ霊的な生れ変わりである。あなたは、好奇心を満足させるより、新しい心を持つ必要がある。……

律法を外面的な生活にあてはめ、どんなに厳格に文字通りこれを守っても、だれも天の王国に入る資格はないということを彼はさとった。人間の目から見れば、彼の生活は正しく尊敬すべきものであった。だがキリストの前に出ると、彼は、自分の心が清潔でなく、自分の生活が聖潔でないことを感じた。……

救い主が新生について説明された時、彼はこの変化が自分のうちに行われるようにと切望した。……イエスは、口に出されないこの質問に答えて、「ちょうどモーセが荒野でへびを上げたように、人の子もまた上げられなければならない。それは彼を信じる者が、すべて永遠の命を得るためである」と言われた(ヨハネ 3:14, 15)。……

ニコデモは教訓を受け入れてそれを持ち帰った。彼は理論について議論するためではなく、魂にいのちを受けるために、新しい方法で聖書を調べた。聖霊の導きに身を委ねた時、彼は天の王国を見はじめた。……

しばらくの間ニコデモはキリストを公然と認めはしなかったが、キリストの生活を注視し、その教えを心に思いめぐらした。サンヒドリンの会議で、彼は、イエスを殺そうとする祭司たちのくわだてに何度も反対した。……

主の昇天後、弟子たちが迫害のために離散した時、ニコデモは大胆に前面に現われた。彼は、キリストの死とともに消滅するものとユダヤ人たちが予期していた若い教会をささえるために、自分の富を用いた。かつては用心深く、疑っていた彼が、危機に際して、岩のように固く立ち、弟子たちの信仰をはげまし、福音の働きを前進させる資金を供給した。彼は、かつては彼に尊敬を払っていた人々たちからあざげられ、迫害された。彼はこの世の財産には貧しくなったが、イエスとの夜の会見から始まった信仰はゆるがなかった。(各時代の希望上巻 199 - 209)

## ヤコブの井戸での対面

「しかし、わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わきあがるであろう。」(ヨハネ 4:14)

イエスがヤコブの井戸のそばで腰をおろして休まれた時、彼はこれまで伝道してほとんど実を結んでいないユダヤからおいでになった。……イエスは疲れ、弱っておられた。それでも彼は他国人であり、イスラエルの異邦人であり、あきらかに罪のうちに生活している一人の女に語りかける機会を逃されなかった。(各時代の希望上巻 233)

女はイエスとお話して、そのみことばに感動した。……彼女は自分の魂がかわいているのを認めた。そのかわきは、スカルの井戸の水では決して満足させることができなかった。これまで接したものの中で、彼女の心をもっと高い必要にこれほどめざめさせたものは何もなかった。イエスは、彼女の生活の秘密を見抜いたことを彼女に自覚させられた。それでも彼女は、イエスが友として自分を憐れみ、愛してくださることを感じた。純潔なイエスの前にいることによって彼女は自分の罪を責められたが、イエスは譴責のことばを一言もお語りにならず、ただ魂を新たにすることのできる恵みについて語られた。……

彼女は水がめを残して、イエスのことばをほかの人たちに伝えるために町へもどった。……喜びにあふれる心をもって、彼女は自分が受けたとうとい光をほかの人たちに与えるために道を急いだ。

彼女は町の人たちに、「わたしのしたことを何もかも、言いあてた人がいます。さあ、見にきてごらんなさい」と言った。「もしかしたら、この人がキリストかも知れません」。彼女のことは人々の心を動かした。彼女の顔には新しい表情があらわれ、全体の様子に変化がみられた。彼らはイエスを見たいという興味をそそられた。(同上 225 - 228)

サマリヤの女は、このお方が救い主であるということがわかるとすぐにほかの人たちをみもとにつれてきた。彼女は、イエスご自身の弟子たちよりも有能な伝道者であることがわかった。……彼らの思いは、将来なされる大きな働きに集中されていた。自分たちのすぐまわりに集めるべき収穫があることに彼らは気がついていなかった。ところが彼らの軽蔑していた女によって、町中の人々が救い主のみことばを聞きにつれてこられた。……

この女は、キリストを信じる実際的な信仰の働きを表わしている。真の弟子はみな伝道者として神の国に生まれているのである。生ける水を飲む者はいのちの泉となる。受ける者が与える者となる。(同上 234)

10月16日

## 疑いから信仰へ

「そこで、イエスは彼に言われた、『あなたがたは、しるしと奇跡とを見ない限り、決して信じないだろう。』（ヨハネ 4:48）

この役人に対する救い主のみことばは、光のひらめきのように、彼の心を明るみに出した。彼はイエスを求めている自分の動機が利己的であることがわかった。彼は動揺している自分の信仰の本当の姿を見た。彼は自分の疑いのために息子のいのちが失われるかもしれないことを認めて深い心配を感じた。彼は自分がいま、人の思いを読むことがおできになり、どんなことでもおできになるお方の前にいることを知った。苦悩に満ちた嘆願をもって、彼は「主よ、どうぞ、子供が死なないうちにきて下さい」と叫んだ（ヨハネ 4:49）。彼は、ヤコブが天使と格闘して、「わたしを祝福してくださいさらないなら、あなたを去らせません」と叫んだ時のように、信仰をもってキリストにすがりついた（創世記 32:26）。

ヤコブのように、彼は勝利した。救い主は、大きな必要を訴えながらすがりつく魂をしりぞけることがおできにならない。イエスは、「お帰りなさい。あなたのむすこは助かるのだ」と言われた（ヨハネ 4:50）。役人はこれまでかつて経験したことのない平安と喜びとをもって救い主の前から立ち去った。彼は息子の病気がなおることを信じたばかりでなく、強い確信をもってキリストを救い主として信頼した。……

……この苦悩していた父親のように、われわれはしばしば何かこの世の利益を望んでイエスを求める。そして自分の願いがかなえられたら、イエスの愛に信頼しようとする。救い主はわれわれが求めるよりももっと大きな祝福を与えようと望んでおられる。イエスは、われわれ自身の心の悪と、イエスの恵みの深い必要とを示すために、われわれの願いに対する答えを遅らせられる。イエスはわれわれが、利己的な動機からイエスを求めることをやめるように望んでおられる。自分の無力と大きな必要を告白して、われわれはイエスの愛に自分自身をまったく委ねるのである。

この役人は、信じる前に自分の祈りの成就を目に見たいと望んだ。しかし彼は、彼のたのみがきかれて祝福が与えられたというイエスのみことばを信じなければならなかった。この教訓をわれわれもまた学ばねばならない。（各時代の希望上巻 238 - 241）

サタンが……この種の証拠を求めているすべての人々の信用を固めるために、数多くの奇跡を行う時が迫っている。真理の光に目を閉じ、自分を欺く奇跡を求める者たちの状況はなんと恐ろしいものであろうか。（伝道 594）

## わたしには資格はありません

「よく聞きなさい。イスラエル人の中にも、これほどの信仰を見たことがない。」(マタイ 8:10)

この百卒長は救い主の力を疑わなかった。……キリストの教えについてうわさを聞いた時、彼はその中に魂の必要に答えるものをみいだした。彼のうちにあるすべての霊的なものが救い主のみ言葉に応じた。しかし彼は、自分はイエスの前に出る価値がないと感じたので、しもべの病気をいやしていただくようにイエスにお願いしてもらいたいとユダヤ人の長老たちに訴えた。(各時代の希望中巻 26 - 28)

百卒長の家に行く途中で、イエスはこの士官自身から「主よ、どうぞご足労くださいませんように。わたしの屋根の下にあなたをお入れする資格は、わたしにはございません」との伝言をお受けになった。それでも救い主は歩みを続けられたので、今度は百卒長が自分でその断りを言うために出てきて「それですから、自分でお迎えに上がるねうちさえないと思ったのです。ただお言葉をください。そしてわたしのしもべをなおしてください。わたしも権威の下にある者ですが、わたしの下にも兵卒がいて、ひとりの者に『行け』と言えば行き、ほかの者に『こい』と言えばきますし、また、僕に『これをせよ』と言えば、してくれるのです。……キリストは『あなたの信じたとおりになるように』と言われた。するとちょうどその時に、しもべはいやされた。ユダヤの長老たちは百卒長が「わが国びと」に示した行為のために彼をキリストの前に賞賛したのである。「わたしたちのために会堂を建ててくれたので、そうしていただくねうちがございます」と、彼らは言った。けれども百卒長は自分のことを「わたしはねうちさえないのです」と言っている。(ミストリー・オブ・ヒーリング 39-40)

彼の心はキリストの恵みに動かされていた。彼は自分自身の無価値を認めたが、それでも助けを求めることを恐れなかった。彼は自分自身の善をたのみにしなかった。彼の論拠は、彼の大きな必要であった。彼は、信仰によって、キリストの真の性格をとらえた。彼はキリストをただ奇跡を行われるお方としてではなく、人類の友人また救い主として信じた。

このように罪人は、だれでもキリストのみもとにくることができる。……

自己にたよる思いをまったく放棄して、われわれは、カルバリーの十字架を見上げて、こう言うのである。

「わたしは何も価値のあるものを手に持ってきていません、

ただあなたの十字架にすがるのみです。」(各時代の希望中巻 29, 30)

10月18日

## 神は差別を憎まれる

「ユダヤ人とギリシヤ人との差別はない。同一の主が万民の主であって、彼を呼び求めるすべての人を豊かに恵んで下さるからである。なぜなら、『主の御名を呼び求める者は、すべて救われる』とあるからである。」(ローマ10:12, 13)

「すると、そこへ、その地方出のカナンの女が出てきて、『主よ、ダビデの子よ、わたしをあわれんでください。娘が悪霊にとりつかれて苦しんでいます』と言って叫びつづけた」(マタイ15:22)。この地方の人民は、昔のカナン族の出身であった。彼らは偶像礼拝者で、ユダヤ人から軽蔑され、憎まれていた。いまイエスのところへやってきた女は、そうした階級の間人であった。彼女は異教徒だった。…

キリストは女の願いにすぐにはお答えにならなかった。イエスは軽蔑されている民族のこの代表者に、ユダヤ人ならこんなふうにしたであろうと思われるような応対の仕方をされた。…

女は、キリストの足下にひれ伏して、ますます熱心に事情を訴え、「主よ、わたしをお助けください」と叫んだ(マタイ15:25)。…

彼女はその場でキリストの天来の感化に従い、イエスが彼女のたのみをかなえて下さる能力を持っておられることに絶対の信仰を持っている。彼女は主の食卓から落ちるパンくずを求めている。彼女はもし犬の特権が与えられるなら、喜んで犬としてみられたいというのである。彼女は、その行動に影響するような国民的あるいは宗教的な偏見や誇りなどを持っていないので、イエスがあがない主であり、また願うことは何でもかなえて下さることができるとすぐ認める。

救い主は満足された。主はご自分に対する彼女の信仰を試みられた。…

同情と愛の顔つきで彼女の方へふり向かれたイエスは、「女よ、あなたの信仰は見あげたものである。あなたの願いどおりになるように」と言われた(マタイ15:28)。その時から、彼女の娘は健康になった。悪鬼はもう彼女を苦しめなかった。…

フェニキヤの女は、ユダヤ人と異邦人の間につみあげられた壁に信仰をもってぶつかった。落胆させられるようなことに抵抗し、疑いたくなるような様子がみえたにもかかわらず、彼女は救い主の愛に信頼した。キリストは、われわれがこのようにキリストに信頼するように望まれる。救いの祝福はすべての魂のためである。自分自身でえらぶ以外には、どんなものも、人が福音を通しイエス・キリストにあつて約束にあずかる者となるのをさまたげることはできない。

神は差別的階級制度を憎まれる。神はこの種のものをすべて無視される。神の御目には、すべての人の魂は同じ価値がある。(各時代の希望中巻156-164)

## 個人的なものであるべき

「み衣にさわりさえすれば、なおしていただけるだろう」(マタイ 9:21)

この言葉を語ったのは十二年間もわずらい、そのために自分の生涯を重荷にしていたあわれなひとりの婦人であった。彼女はすべての資産を医者や治療に費やしたあげく、回復の見込みがないと宣告された。しかし大治癒者イエスのことを聞いて、その希望が再びよみがえったのである。……女は幾度かキリストに近寄ろうとして努力はしたがむだだった。(ミストリー・オブ・ヒーリング 34, 35)

彼女は絶望しかかっていた、するとその時、群衆をおしわけて、イエスが彼女の近くにやってこられた。……

だが混雑の最中であって、彼女は イエスに話しかけることができずイエスのお姿をちらっと見ただけだった。……イエスが通りすぎようとされると、彼女は前へのり出して、イエスの衣のへりにかすかにさわることができた。その瞬間、彼女は、自分がいやされたことがわかった。一度だけさわること、彼女の一生の信仰が集中されていた。するとたちまち、彼女の痛みと弱さは完全に健康にかわった。

感謝の気持をもって、彼女は群衆の中からしりぞこうとした。すると突然イエスが立ち止まられた。……

救い主は不注意な群衆が偶然さわったのと、信仰をもってさわったのとを区別することがおできになった。このような信頼を、何にも言わないで、みすごすわけにいかなかった。……

かくしてもむだなことがわかると、彼女はふるえながら前へ出て、イエスの足下にひれ伏した。彼女は、感謝の涙を流して、自分の苦難の物語を告げ、救われた次第を語った。イエスは、「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい」とやさしく言われた(ルカ 8:48)。いやしの力をただイエスの衣にさわる行為だけに求める迷信の余地を、イエスはお与えにならなかった。いやしが行われたのは、イエスとの外面的な接触によってではなくて、イエスの天来の力にすぎる信仰によってであった。……

霊的なことにおいてもこれと同じである。不用意に宗教のことを語ったり、魂のかわきや生きた信仰がなくて祈ったりしても、それは何の役にもたたない。キリストをただ世の救い主として受け入れる口さきだけの信仰では、決して魂をいやすことができない。……

キリストについて信ずるだけでは十分でない。キリストそのものを信じなければならぬ。われわれを益する信仰は、キリストを自分自身の救い主として信ずる信仰、キリストの功績を自分自身のものとする信仰だけである。(各時代の希望中巻 72 - 74)

10月20日

## わたしに足りないもの

「また、ある役人がイエスに尋ねた、『よき師よ、何をしたら永遠の生命が受けられましょうか。』」（ルカ 18:18）

永遠の命を得るために何をしたらよいかというイエスに尋ねた青年に対する答えは「いましめを守りなさい」であった。（教会への証 4 巻 219, 220）

神の品性は、神の戒めの中に表現されている。そして、人間が神との調和を保つためには、神の戒めの原則が、すべての行為の源泉とならなければならない。  
…

「いましめを守りなさい」との言葉に対して、若者は、「どのいましめですか」とたずねた。……キリストは、シナイ山から与えられた戒めのことを言っておられたのである。彼は、十戒の第 2 枚目の板からの数か条をあげられた。……

青年はちゅうちょすることなく、「それはみな守ってきました。ほかに何が足りないのでしょうか」と答えた。彼の律法に関する考えは、外面的で表面的であった。彼は、人間的な標準から見れば、汚点のない品性を持っていた。彼の外面的生活は、大体において、罪の無いものであった。彼も自分の服従は、非のうちどころのないものであると信じていた。しかし、神と自分の魂との関係が、全く正しいものではないのではないかという、密かな恐れがあった。これが「ほかに何が足りないのでしょうか」という質問を彼にさせた。

「もしあなたが完全になりたいと思うなら、帰ってあなたの持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に宝を持つようになる。そして、わたしに従ってきなさい」と、キリストは言われた。「この言葉を聞いて、青年は悲しみながら立ち去った。たくさんの資産を持っていたからである。」

自分を愛する者は、律法を犯す者である。イエスは、このことを青年に示そうと望んで、彼の心の中の利己心をあらわすテストをお与えになったのである。イエスは、彼の品性の病気になる所をお示しになった。青年は、それ以上、啓発されることを望まなかった。彼は、心に偶像を持っていた。この世が、彼の神であった。彼は戒めを守っていたと公言はしたけれども、すべての戒めの精神と命である原則に欠けていた。彼は、神と人に対する真の愛を持っていなかった。これが無いことは、天国に入るにふさわしい者とするすべてを、彼が欠いていたことを示したものであった。彼は、自己を愛し、世の利益を愛していたから、天の原則と調和していなかった。（キリストの実物教訓 370, 371）

## テストに失敗

「イエスは彼に目をとめ、いつくしんで言われた、『あなたに足りないことが一つある。帰って、持っているものをみな売り払って、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に宝を持つようになろう。そして、わたしに従ってきなさい。』」(マルコ10:21)

キリストは、あたかもこの若者の生活を見通し、その品性をさぐられるかのように、彼の顔を見つめられた。イエスは、彼を愛され、彼の品性を実質的に変えるような平安と恵みと喜びを与えたいと熱望された。…

何という熱心な思いと魂のかわきをもって、キリストは、この若者が神のみたまの招きに応ずることを望みながら、彼をごらんになったことだろう。…

役人はキリストのみことばの意味を全部すぐにさとって、悲しく思った。…

目に見えない天の宝のために、目に見えるこの世の宝を捨てることはあまりに大きな冒険であった。彼は、永遠の生命の申し出をことわって立ち去り、その後は世俗が彼の礼拝を受けることになった。幾千の人々がキリストと世俗をはかりにかけて、このきびしい試練を味わっている。そして多くの者が世俗をえらぶ。この若い役人と同じように、彼らは、「わたしはこの人をわたしの指導者とすまい」と心のうちに言いながら、救い主から離れて行くのである。…

天国を望みながら、しかも定められた条件をみて離れ去ることがどういうことになるかを、人はみな考えてみなければならない。キリストに、「いやです」と言うことが、何を意味するかを考えなさい。この役人は、「いや、わたしはあなたに全部をさしあげられません」と言った。われわれはこれと同じことを言うだろうか。…

この役人の財産は、彼が忠実な家つかさになるように彼に委託されたのであった。彼はそうした財産を、困っている人々に恵むために分配すべきであった。同様に神は、今も、人に金銭、才能、機会を委託されるが、それは、彼らが神の代理人となって貧しい人々や苦しんでいる人々を助けるためである。委託された賜物を神の望まれる通りに用いる者は、救い主と共に働く者となる。…

この若い役人と同じように、高い信任の地位にあつて、大きな財産を持っている人々にとっては、キリストに従うためにすべてを放棄することは犠牲が大きすぎるように思えるかもしれない。しかしこれはキリストの弟子になりたいと望むすべての人の行為の法則である。服従に欠けるものは何も受け入れられない。自我を屈服させることがキリストの教えの本質である。(各時代の希望中巻 327 - 333)

10月22日

## 物事を正しくされた

「人の子がきたのは、失われたものを尋ねださして救うためである。」(ルカ 19:10)

「取税人のかしら」ザアカイはユダヤ人で、同国人からきらわれていた。彼の地位と富は人々のいやがる職業の報酬で、この職業は不正と搾取の別名のように考えられていた。しかしこの富める税関役人のザアカイは、それほど冷酷な人間ではなかった。その世俗的で高慢な外観の下には、天来の感化力に動かされやすい心があった。ザアカイは、イエスのことを聞いていた。……この取税人のかしらの内には、もっとよい人生をあこがれる思いがあった。……彼は……自分が神の前に罪人であることを感じた。しかし彼がイエスについて聞いていたことが、彼の心に望みの火をともした。悔い改め、すなわち生活の改革は、自分のような者にさえ可能なのだ。……ザアカイは自分の心をとらえたこの自覚にただちに従い、自分が不正を働いた相手の人々の損害をさっそく償いはじめた。

このように彼がすでに自分の歩みを正しい道へ戻し始めていた時に、イエスがエリコに入ってこられるといううわさが町じゅうに伝わった。ザアカイはイエスに会う決心をした。……

群衆のいる前で、「ザアカイは立つて主に言った、『主よ、わたしは誓って自分の財産の半分を貧民に施します。また、もしだれかから不正な取立てをしなければ、それを4倍にして返します』。

イエスは彼に言われた、『きょう、救がこの家に来た。この人もアブラハムの子なのだから』(ルカ 19:8, 9)。(各時代の希望中巻 373, 376)

よりよい道を知らないために、非常にわずかの機会にしかめぐまれず、誤った道に歩んでいる者が多くいる。そういう人々に、光が潮のようによせて来るのである。キリストがザアカイに、「きょう、あなたの家に泊まることにしているから」とお語りになったように、主は彼らにも語りかけられる(ルカ 19:5)。そしてがんこな罪人であると見なされていた者たちが、キリストに目を留めていただいたために、幼児のようにやさしい心を持つ者となる。多くの者が大きな過ちと罪から救い出される。そして機会と特権に恵まれていながら、それを尊ばなかった者の位置をかかわって占めるのである。彼らは神にえらばれた者、尊い者となり、キリストがみ国にお入りになる時には、彼らはキリストのみ座の一番近くに立つのである。(キリストの実物教訓 216, 217)

## 金持ちと神

「すなわちその悪人が質物を返し、奪った物をもどし、命の定めに従い歩み、悪を行わないならば、彼は必ず生きる。決して死なない。」(エゼキエル 33:15)

ザアカイは、聖霊の感化力に身をまかせるとすぐに、正直に反する行為を一切捨てた。

改革を伴わない悔い改めは、真正なものではない。キリストの義は、告白されていなければ捨てられてもいない罪をおおう外衣ではない。……

悔い改めた魂はみな、ザアカイのように、自分の生活に目立っている不正な習慣を放棄することによって、キリストが心の中に入られたことを表明する。この取税人のかしらのように、彼は損害を償うことによって誠実心を証明する。……

もしわれわれが商売上の不正な取引で他人に損害を与えたり、商売上のごまかしをやったり、だれかをだましたりしたなら、たとえそれが法律を犯すことでもなく、われわれは、そのまちがいを告白して、力の及ぶかぎり償いをすべきである。われわれは、取ったものを返すばかりでなく、われわれがそれを所有していた間に正しく賢明に用いられたら蓄積されたはずの分まですべて返すのが当然である。

救い主は、ザアカイに、「きょう、救がこの家に来た」と言われた(ルカ 19:9)。ザアカイ自身が祝福されたばかりでなく、彼といっしょに家族の全部が祝福されたのである。キリストは、ザアカイに真理を教えるために、また彼の家族にみ国の事がらを教えるために、彼の家庭に行かれた。彼らはラビたちと礼拝者たちから軽蔑されて、会堂から閉め出されていた。しかしいま、エリコ中で最も恵まれた家族として、彼らは、自分の家で天来の教師のまわりに集まり、自分たちの力で生命のみことばを聞いた。

魂に救いがのぞむのは、キリストが個人的な救い主として受け入れられる時である。ザアカイはイエスを自分の家庭の一時のお客としてばかりでなく、魂の宮に住むお方として受け入れた。(各時代の希望中巻 377 - 379)

富裕な若い役人がイエスから立ち去った時に、弟子たちは主が、「財産のある者が神の国にはいるのは、なんとむずかしいことであろう」と言われるのを聞いて驚き、互に、「それでは、だれが救われることができるのだろうか」と叫んだ(マルコ 10:23, 26)。いま彼らは、「人にはできない事も、神にはできる」と言われたキリストのみことばが事実であることを実際に示された(ルカ 18:27)。彼らは、富裕な人でも、神の恵みによって、神の国に入ることができることを知った。(同上 376)

10月24日

## 彼女はすべてを捧げた

「そこで、イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた、『よく聞きなさい。あの貧しいやもめは、さいせん箱に投げ入れている人たちの中で、だれよりもたくさん入れたのだ。みんなの者はありあまる中から投げ入れたが、あの婦人はその乏しい中から、あらゆる持ち物、その生活費全部を入れたからである。』」(マルコ 12:43, 44)

イエスは、さいせん箱がおいてある庭にいて、献金を入れにやってくる人たちを見守っておられた。多くの金持ちが多額の金を持参しては、それを見せつけながらささげた。イエスは彼らを悲しげに見ておられたが、その多額な献金については何も言われなかった。一人の貧しいやもめが、人に見られるのを恐れるかのように、おずおずと近づいてくるのを見られた時、イエスのお顔は、たちまち明るくなった。…

機会を見て、彼女は急いで二枚のレプタを投げ入れ、いそいで引きかえそうとした。しかしそうしている時に、彼女はイエスの御目にとまり、それは彼女の上にとじとそそがれていた。…

救い主は弟子たちをみもとに呼んで、このやもめの貧しさに注目するようにお命じになった。その時、主のおほめのことばが彼女の耳にきこえた。…自分の行為が理解され、認められたことを感じ時、彼女の目に喜びの涙が浮かんだ。…イエスは、彼女の動機を理解された。彼女は宮の奉仕が神に定められたものであることを信じていたので、それをささげるために全力をつくそうと願った。彼女は自分のできることをした。彼女のこの行為は、各時代を通じて彼女の思い出の記念となり、また永遠にわたって彼女の喜びとなるのであった。彼女はささげ物といっしょに心をささげた。そのささげ物の価値は、貨幣の価値によってではなく、彼女の行為の動機となった神への愛とそのみわざに対する関心によってはかられた。…

金持ちたちは豊富な中からささげ、しかもその多くの者が、人々から見られ、あがめられるためにささげた。彼らは多額の寄付をしても、そのために安楽な生活あるいはいざいたくなく生活ができなくなるといりではなかった。その寄付は、犠牲の必要がなく、価値においてもやもめのレプタと比較することはできなかった。…

彼女の自己犠牲の模範は各国、各時代の幾千幾万の人々の心に働きかけた。それは金持ちにも貧しい人にも訴え、彼らの献金は、彼女の献金額をまじ加えた。やもめのレプタは、神の祝福によって大いなる結果を生じりみなもととなった。神の栄えをあらわしたいとの真心からの願いによってささげられる献金や、なされる行為はみなこれと同じである。それは全能者の目的につながっている。それが善に及ぼす結果はだれもはかり知ることができない。(各時代の希望下巻 67-71)

## 思いわずらいと悩み

「主は答えて言われた、『マルタよ、マルタよ、あなたは多くのことに心を配って思いわずらっている。しかし、無くてならぬものは多くはない。いや、一つだけである。マリヤはその良い方を選んだのだ。そしてそれは、彼女から取り去ってはならないものである。』」(ルカ 10:41, 42)

キリストがすばらしい教訓をお与えになる時、マリヤは敬虔で熱心な聞き手となって、その足下にすわった。ある時、マルタは、食事の支度の苦勞に困ったあげく、キリストのみもとへきて、「主よ、妹がわたしだけに接待をさせているのを、なんともお思いになりませんか。わたしの手伝いをするように妹におっしゃってください」と言った(ルカ 10:40)。それは、キリストが初めてベタニヤにこられた時であった。救い主と弟子たちは、エリコから徒歩で、骨の折れる旅をしてこられた。マルタは彼らの疲れをねぎらうことに心をうばわれ、その熱心さのあまり、お客に対する当然の礼儀を忘れた。……

マルタにとって必要な「一つのもの」は、落ちついた、信心深い精神、未来の永遠の生命について知りたいというもっと強い熱望、靈的進歩に必要な徳であった。彼女は、過ぎ去ってしまうものに対する関心よりも、永遠に続くものに対する関心の方が必要だった。イエスは、ご自分の子らに、救いに至る知恵を与える知識を得るあらゆる機会をつかむように教えようと望まれる。キリストのみわざには、注意深く、かつ精力的な働き人が必要である。マルタのような人たちが熱心に宗教活動をする広い分野がある。しかし彼らをまずマリヤといっしょに、イエスの足下にすわらせなさい。勤勉と敏速と精力とをキリストの恵みによってきよめなさい。その時、そのような生活は、征服されることのない善の力となるのである。(各時代の希望中巻 335, 336)

青年でも大人でも誘惑と罪に実にたやすく陥るのは、彼らが神のみ言葉を学ばず、それについて瞑想しないからである。生活と品性に確固とした意志の力が表されないのは、神のみ言葉のきよい教訓をおろそかにするからである。彼らは純潔できよい思想を起こさせるものに心を向けること、また不純な、真実でないものから心を転ずることのために熱心な努力を払わない。マリヤのように良い方を選び、神なる教師から学ぶために、イエスの足元に座る者はほとんどいない。心にキリストのみ言葉を学び、それを生活に実行する者が少ないのである。(ミストリー・オブ・ヒーリング 441)

10月26日

## 愛の賜物

「この女はできる限りのことをしたのだ。」(マルコ 14:8)

ベタニヤのシモンは、イエスの弟子とみなされていた。彼は、公然とキリストに従う者の仲間に加わった少数のパリサイ人の一人であった。シモンはイエスを教師として認め、イエスがメシヤであるようにと望んでいたが、救い主として受け入れてはいなかった。彼の品性は変えられていなかったし、彼の主義は変化していなかった。

シモンはハンセン病をいやしてもらっていたので、彼がイエスにひかれたのはそのためであった。彼は、感謝の気持を表したいと望み、キリストの最後のベタニヤ訪問の時に、救い主と弟子たちにごちそうをした。……救い主は……

……シモンを一方に、死人の中からよみがえらせておやりになったラザロを一方にして、食卓におつきになった。マルタが食卓の給仕をしたが、マリヤはイエスの口から出るひとことばひとことばを熱心にきいていた。イエスが、その憐れみによって、マリヤの罪をゆるし、また愛する兄弟を墓からよみがえらせてくださったので、マリヤの心は感謝に満たされていた。彼女は、イエスがご自分の死が近づいていることを語られるのを聞いていたので、深い愛とかなしみのうちに、イエスに尊敬を示したいと熱望していた。彼女は、イエスのお体に油をそそぐために、自分で大きな犠牲を払って、「非常に高価で純粋なナルドの香油が入れている石膏のつぼ」を買っていた(マルコ 14:3)。しかしいま、多くの者は、イエスが王位につかれるのだと宣言していた。マリヤの悲しみは喜びに変わり、彼女は自分が真先に主に尊敬を示したいと熱望した。香油のつぼを割ると、彼女は、中の油をイエスの頭と足にそそいだ。それから彼女は、泣きながらひざまずいて、その涙でイエスの足をぬらし、長くたれた髪の毛でぬぐった。……

ユダはこの行為を非常に不愉快に思った。……彼は……たずねた。「なぜこの香油を300デナリに売って、貧しい人たちに、施さなかったのか」。……「なんのためにこんなむだ使をするのか」というつぶやきが食卓のまわりにひろがった。

マリヤはこの非難の声をきいた。……彼女は引きさがろうとした。するとその時、「するままにさせておきなさい。なぜ女を困らせるのか」という主の声がきこえた(マルコ 14:6)。……非難のつぶやきをおさえる声をあげて、主はこう言われた。「わたしによい事をしてくれたのだ。貧しい人たちはいつもあなたがたと一緒にいるから、したいときにはいつでも、よい事をしてやれる。しかし、わたしはあなたがたといつも一緒にいるわけではない。この女はできる限りの事をしたのだ。すなわち、わたしのからだに油を注いで、あらかじめ葬りの用意をしてくれたのである」(マルコ 14:6-8)。(各時代の希望中巻 380-386)

## ただよう香り

「よく聞きなさい。全世界のどこでも、福音が宣べ伝えられる所では、この女のした事も記念として語られるであろう。」(マルコ 14:9)

マリヤは、救い主の死体に惜しまずふりかけようと思っていたかおり高い献げ物を、主の生きたお体にそそいだのである。葬りの時だったら、そのかおりは墓の中にたちこめるだけであるが、いまそれは、彼女の信仰と愛についての確証とともに主の心を喜ばせた。アリマタヤのヨセフとニコデモは、愛の献げ物を、イエスが生きておられる時にささげなかった。にがい涙とともに、彼らは、主の冷たい、意識のなくなったお体のために高価な香料を持参した。香料を墓に持って行った婦人たちは、主がよみがえられたので、自分たちの用事がむだであったことを知った。しかしマリヤは、救い主が彼女の信心を認めてくださることができると、主に愛をそそぐことによって、葬りのために主に油をそそいだのであった。こうして主は、その大いなる試練という暗黒の中を進んで行かれた時に、この行為の思い出、すなわちあがなわれた者が永遠に主に対してささげる愛の保証をたずさえて行かれたのであった。

死人のために高価な献げ物を持参する人が多い。…見ることも聞くこともできない者に向かって、やさしき、感謝、愛情のすべてがそそがれる。疲れ果てた心が最も必要としていた時に耳にきくことができ、心に感ずることができた時にそうしたことばが語られていたら、そのかおりはどれほどとうとかったことだろう。…

キリストは、マリヤに彼女の行為の意味をお告げになり、…「この女がわたしのからだにこの香油を注いだのは、わたしの葬りの用意をするためである」とキリストは言われた(マタイ 26:12)。香油のつぼが割れて、そのかおりが家中に満ちたように、キリストは死なれて、そのお体がこわれるのであった。しかし主は墓からよみがえって、その生命のかおりが地を満たすのであった。…

将来をごらんになって、救い主は、福音について確信をもって語られた。福音は全世界に宣べ伝えられるのであった。そして、福音がひろがるかぎりどこまでも、マリヤの献げ物はそのかおりを放ち、人々の心は彼女の自然に発した行為によって恵まれるのであった。国々は起こり、そして倒れるであろう。君主たちと征服者たちの名前は忘れられるであろう。しかしこの婦人の行為は、聖史のページに永久に残るであろう。世にあるかぎり、あの割られた香油のつぼは、墮落した人類に対する神の豊かな愛の物語を告げるのである。(各時代の希望中巻 386 - 388)

10月28日

## 高価すぎるものはない

「なぜならキリストの愛がわたしたちに強く迫っているからである。」(コリント第二 5:14 上句)

キリストは、マリヤが主のみこころをなそうと熱心に望んだことをよろこばれた。主は、弟子たちが理解しなかった、また理解しようとしなかった純粋な愛という富を受け入れられた。主のためにこの奉仕をしたいというマリヤの願いは、キリストにとってこの世のすべての貴重な香油よりもとうとかった。なぜならこの願いに、世のあがない主に対する感謝があらわされていたからである。彼女にそうするように迫ったのはキリストの愛であった。キリストの品性の比類のない美しさが彼女の魂を満たしたのであった。あの香油は、ささげた者の心の象徴であった。それは天の流れを溢れるまで受け入れた愛が外に向かって表現されたのであった。

マリヤの行為は、キリストに対する弟子たちの愛の表現がキリストによろこばれるということを彼らに示すのに、ちょうど必要な教訓であった。キリストは彼らにとって全部であったが、彼らはまもなく主の存在が取り去られ、主の大いなる愛に対する感謝のしるしを示すことができなくなることに気がつかなかった。天の宮から離れ、人間として一生を送っておられるキリストの孤独は、弟子たちから正しく理解もされなければ、評価もされなかった。……

彼らは、イエスのおそばにいた時に心のうちにある愛と感謝の表現としてイエスのためになし得た多くのことについて、その真の意義をのちになって知った。イエスがもはや彼らと一緒におられなくなつた時、彼らは、イエスの心をよろこばせるような心づくしを示すことができたのだったということがわかり始めた。彼らはもうマリヤを非難しないで、自分自身を責めた。ああ、キリストにささげるよりも貧しい人たちに施した方がよいなどと非難したことばを取消すことができた。彼らは、主のくだかれた体を十字架からおろしながら、激しく心を責められた。

今日のわれわれの世界においても明らかにこのことが不足している。しかしキリストが自分にとってどういうお方であるかを全部理解している人はほとんどいない。もしそれが理解されているなら、マリヤの大きな愛があらわされ、惜しむことなく油がそそがれるであろう。高価な香料もむだ使いとはいわれないだろう。どんなものも、キリストにささげるには高価すぎるのか、キリストのために耐え忍ぶには克己と犠牲が大きすぎるということはないであろう。(各時代の希望中巻 390, 391)

## シモンの改心

「だから、ああ、すべて人をさばく者よ。あなたには弁解の余地がない。あなたは、他人をさばくことによって、自分自身を罪に定めている。さばくあなたも、同じことを行っているからである。」(ローマ 2:1)

主人役のシモンは、マリヤの贈り物に対するユダの非難に心を動かされ、イエスの行為に驚いた。彼のパリサイ的な誇りは傷つけられた。彼は、お客たちの多くが不信と不快の思いでキリストを見ていることを知った。シモンは心の中で、「もしこの人が預言者であるなら、自分にさわっている女がだれだか、どんな女かわかるはずだ。それは罪の女なのだから」と思った(ルカ 7:39)。

キリストは、シモンのハンセン病をなおすことによって、彼を生けるしかばねから救われたのだった。しかしいまシモンは、救い主が預言者であるかどうかを疑った。…イエスはこんなに無遠慮にふるまっている女について何もご存じないのだ、そうでなければこの女がイエスにさわるのをおゆるしになるはずがないと、シモンは思った。…

ナタンがダビデに対してそうしたように、キリストは譬のヴェールの下に急所を突くことばをかくされた。キリストは、自分自身に宣告をくだす責任を主人のシモンに負わせられた。シモンは、自分がいま軽蔑している女を罪に陥れたのであった。マリヤはシモンからひどく悪いことをされたのであった。……しかしシモンは、自分の方がマリヤよりも正しいと思っていたので、イエスは、彼の不義が実際にどれほど大きいものであるかを彼に認めさせようと望まれた。500 デナリの借金が50 デナリの借金よりも大きいように、シモンの罪はマリヤの罪よりも大きいということを、イエスは、シモンにお示しになりたかったのである。…

救い主に対するシモンの冷淡さと怠慢は、彼が自分の受けた恵みを感謝していないことをあらわした。彼は、イエスを自分の家へ招待することによってイエスを尊敬していると思っていた、しかしいま彼は、自分の本当の姿を見た。…彼の宗教はパリサイ主義という衣であった。…マリヤがゆるされた罪人であったのに、彼はゆるされていない罪人であった。シモンがマリヤに強要しようとした硬直した正義の法則が、彼を罪に定めた。

シモンは、イエスが自分を客たちの前で公然と非難されなかった親切さに、心を打たれた、シモンは、マリヤに望んだような扱い方をしなかった。……公然ときびしく非難されたら、シモンは、心をとどして悔い改めなかったであろうが、忍耐深い教えによって、彼は自分の誤りをさとった。彼は自分が主に対して大きな負債を負っていることを知った。彼の傲慢心はへりくだり、彼は悔い改めた。そしてこの傲慢なパリサイ人は、けんそんで、自己犠牲的な弟子になった。(各時代の希望中巻 392 - 395)

10月30日

## キリストはわたしたちの可能性を見られる

「それであなたに言うが、この女は多く愛したから、その多くの罪はゆるさされているのである。少しだけゆるされた者は、少しだけしか愛さない。」(ルカ 7:47)

マリヤは非常に悪い罪人として見られていたが、キリストは、彼女をそうした生活に追いやった事情をご存じだった。主はマリヤの魂から望みのともし火をすっかり消してしまうこともおできになったのであるが、そうはなさらなかった。マリヤを絶望と滅亡から引きあげたのはイエスであった。彼女の心と思いを支配していた悪魔を責められるイエスのことばを、彼女は7回聞いた。彼女は、自分のために天父に祈ってくださるイエスの強い叫びを聞いた。彼女は、イエスのけがれない純潔さのうちにあって罪がどんなに憎むべきものであるかを知り、キリストの力によって勝利したのだった。

マリヤの問題が人間の目には絶望的に見えた時にも、キリストは彼女のうちに善への可能性をごらんになった。キリストは彼女の性格のよい面をごらんになった。あがないの計画によって、人類は大きな可能性をさづけられていたので、こうした可能性がマリヤのうちに実現されるのであった。キリストの恵みを通して、彼女は、神の性質にあずかる者となった。墮落し、心が悪霊の住み家となっていた者が、交わりと奉仕を通して救い主に近づけられた。イエスの足下にすわって、イエスから学んだのはマリヤであった。イエスの頭に貴重な香油をそそぎ、イエスの足を涙で洗ったのはマリヤであった。マリヤは十字架のそばに立ち、イエスについて墓に行った。マリヤは、イエスの復活ののち一番先に墓にいた。よみがえられた救い主のことを一番先に言いひろめたのはマリヤであった。

イエスは、一人一人の魂の事情をご存じである。自分は罪深い者だ、とても罪深いとあなたは言うだろう。あるいはそうかも知れない。しかしあなたが悪ければ悪いほど、イエスが必要なのである。主は泣いて悔い改める者を決してしりぞけられない。主は明らかに示すことがおできになることを全部だれにでもお告げになるとは限らない。主は、ふるえている魂に勇気を出しなさいと命じられる。主はゆるしと回復とを求めてみもとに来るすべての者を心よくゆるしてくださる。

.....

主は、きょう香壇のそばに立って、神の助けを望む者の祈りを神のみ前にささげておられる。

イエスを避け所として求める魂を、主は告発とことばの争いから高めてくださる。だれも、またどんな悪天使も、このような魂を訴えることはできない。キリストはそうした魂をご自身の神また人としての性質に結びつけられる。彼らは、罪を負うてくださるお方のそばにあって、神のみ座から出る光のうちに立つのである。(各時代の希望中巻 395 - 397)

## ふりかえったペテロ

「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか。」(マタイ 14:31)

イエスを見つめながら、ペテロは安全に歩いて行く。だが自己満足のうちに舟の中の仲間たちの方をちらっとふりかえった時、彼の目はイエスからそれる。風は荒れ狂っている。波が高くうねってペテロと主との間にまっすぐやってくると、ペテロは恐れる。一瞬キリストの姿がペテロの視界からかくれると、彼の信仰は失われる。ペテロは沈み始める。しかし大波が死と語っている間に、ペテロは荒れ狂う波から目をあげてイエスを見つめ、「主よ、お助けください」と叫ぶ(マタイ 14:30)。すぐにイエスは、ペテロのさし出した手をつかんで、「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」と言われる(マタイ 14:31)。

ペテロは、主の手につかまりながら並んで歩いて、一緒に舟の中に入った。だがペテロはこんどはおとなしくだまっていた。彼は仲間たちに自慢する理由がなかった。不信と高慢のためにあぶなくいのちを失いかけたからである。イエスから目をそらした時、彼は足場を失い波のまん中に沈んだのだ。

われわれも、苦難におそわれる時、ペテロのようになることがどんなに多いことだろう。われわれは、目を救い主にそそがないで、波を見つめる。われわれの足はすべり、もりあがった波がわれわれの魂の上を越える。イエスは、ペテロが滅びるために、みもとにこいと命じられたのではなかった。イエスは、ご自分に従うようにわれわれを召しておいて、そのあとでわれわれを捨てるようなことをなさらない。……

海上での出来事を通して、イエスは、ペテロに彼自身の弱さを示そうと望まれた。すなわち彼の安全は、たえず神の力にたよっていることにあることを示そうと望まれたのである。試みの嵐のさなかにあつて、彼は、まったく自分にたよらずに、救い主によりたのむ時はじめて安全に歩むことができたのであった。ペテロの弱いところは、彼自身が一番強いと考えていたところにあつた。彼は、自分の弱さを感じないうちは、キリストによりたのむ必要を認めることができなかつた。もし彼が海上でのあの経験を通して、イエスが彼に教えようとした教訓を学んでいたら、彼は、大きな試練がやってきた時に失敗しなかつたであろう。

日ごとに、神は、ご自分の子らをお教えになる。日常生活の環境を通して、神は、ご自分の子らが神の摂理によって彼らに負わされている一層広い舞台での役割を果たすように、彼らを準備しておられる。人生の大危機における勝利か敗北かを決定するのは、毎日の試みの結果である。(各時代の希望中巻 123 - 125)

## 研究 9

わたしたちが信仰の一致に到達するまで



## どのように聖霊による一致が 実現するか？

「聖霊による一致」が、教会を一つにします(エペソ 4:3)。

それでは、どのように聖霊の働きであることがわかるでしょうか？

「わたしたちはみな、顔おおいなしに、主の栄光を鏡に映すように見つ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく。これは霊なる主の働きによるのである」(コリント第二 3:18)。

主と同じ姿に変えて下さる、これが御霊の働きです。その段階をペテロは次のように話しています。

「それだから、あなたがたは、力の限りをつくして、あなたがたの信仰に徳を加え、徳に知識を、知識に節制を、節制に忍耐を、忍耐に信心を、信心に兄弟愛を、兄弟愛に愛を加えなさい」(ペテロ第二 1:5-7)。

主の姿に変えられるには、ちょうど植物や子供が成長するように、段階があります。その段階は一段一段のぼっていきはしごのように加えていくものであるとペテロは説明しました。地上ではしごに登るときは、地面にしっかりとついて安定していることを確認します。しかし、上に引き上げていただくはしごはどうでしょうか？例えば、救助でヘリコプターからはしごを降ろし、人を助ける場合があります。そのときは、下ではなく、上がしっかりとついていることが大切です。

「兄弟愛に愛を加えなさい」。はしごの最上段は、愛だとあります。この愛について、パウロはコリント第一 13 章で、アガペ、すなわち無条件的な愛であると述べました。ヤコブが自分の罪のゆえに兄エサウの顔を恐れて逃亡し、天との関係が切れてしまったのではないかと恐れながら休んだその夜、神は大きな憐れみの中に夢の中で天に到達しているはしごを示してくださいました。「そして主はその上に立つて」おられました(創世記 28:13 欽定訳)。このはしごは神に

至っています。

愛を表す言葉には、二つあります。無条件的な神の愛をもって愛するアガペと、人の愛を表すフィリアです。これは、イエスがよみがえられた後、ご自分を三度否定したペテロに「ヨハネの子シモンよ、わたしを愛するか」と三度お聞きになったときに、主が使い分けられた言葉でした。ペテロはいたむ心で「主よ、そうです。わたしがあなたを愛することは、あなたをご存じです」と最大限の愛を表現しましたが、フィリア以上の言葉を用いることはできませんでした。このフィリア、すなわち兄弟愛が美しくあらわれた時代の教会は、ヒラデルヒヤと呼ばれています。しかし、このはしごの最上段はアガペに至るのです。

そのはしごを上っていくとき、最初の段は信仰です。上の段が間違いなく固定されていることを確認したあとは、何も言わずにしっかりとつかみながら一段ずつのぼっていく信仰があれば、必ず到着します。

兄弟愛が完成するために与えられたのが教会です。イエスをご自分を愛する教会を残して行かれる前に、彼らに「栄光を与えました」と言われました。こうして、彼らが一つになるためでした。

「だが、あなたがたは、更に大いなる賜物を得ようと熱心に努めなさい。そこで、わたしは最もすぐれた道をあなたがたに示そう」とパウロが述べています（コリント第一 12:31）。その最もすぐれた道が、その言葉に続くコリント第一 13 章、すなわちアガペの愛です。

何のためでしょうか。

「それは、聖徒たちをととのえて奉仕のわざをさせ、キリストのからだを建てさせ、わたしたちすべての者が、神の子を信じる信仰の一致と彼を知る知識の一致とに到達し、全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた徳の高さにまで至るためである。…愛にあつて真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達するのである」（エペソ 4:12-15）。これが、教会を一致させる力です。これが、イエスの約束された栄光であり、彼らの祈り求めたものでした。そして、この祈りに答えて彼らを一致させる聖霊が与えられたのです。



は墓の周りに光が輝いているのに気がつき、墓をのぞきこんだところ、そこが空っぽであることがわかりました。

彼女たちがその場にとどまっていると、突然、輝く衣を着た若者が墓のそばに腰をおろしているのを見ました。それは石をころがした天使でした。恐れて彼女たちは逃げようとしたのですが、天使が言いました。「恐れることはない。あなたがたが十字架におかかりになったイエスを捜していることはわたしにわかっているが、もうここにはおられない。かねて言われたとおりに、よみがえられたのである。さあ、イエスが納められていた場所をさげなさい。

そして急いで行って弟子たちにこう伝えなさい『イエスは死人の中からよみがえられた。見よ、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。そこでお会いできるであろう』」(マタイ 28:5-7)。

女たちが墓の中をまた見ると、彼女たちは別の輝く天使を見ました。彼は彼女たちに尋ねました。「あなたがたはなぜ生きたかたを死人の中にたずねているのか。その方はここにはおられない。よみがえられたのだ。まだガリラヤにおられたとき、あなたがたにお話になったことを思い出しなさい。すなわち、人の子は必ず罪人らの手に渡され、十字架につけられ、そして三日目によみがえる、と仰せられたではないか」(ルカ 24:5-7)。

そのとき天使たちはキリストの死と復活を説明しました。彼らは女たちにキリストご自身がご自分の十字架とよみがえりについて前もって言われていた、このお方自身が語られた言葉を思い出させました。これらのイエスさまの言葉は今や彼女たちに明らかにされ、新らたな望みと勇気をもってうれしい知らせを伝えるために急いで去っていきました。

## さつまいもの煮物 (レモン風味)

### ■材料

さつまいも	大1本
粗糖	大さじ2
しょう油	大さじ1
レモン	輪切り1切れ、もしくはしぼり汁少々

### ■作り方

1. さつまいもを食べやすい大きさに切ります。
2. お鍋に、切ったさつまいもとひたひたの水を入れ、粗糖、醤油を加えてひと混ぜします。
3. ふたをして中火で煮ます。ぐつぐつとなったらふたをとって弱火にし、柔らかくなるまで煮ます。
4. 柔らかくなったら火を止めて、レモンを入れ、しばらくそのまま冷まします。翌日もおいしいです。

## 教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校 : 9:30-10:45 (公開放送)

礼拝説教 : 11:00-12:00 (公開放送)

午後の聖書研究 : 14:00-15:00

【公開放送】 <http://www.4angels.jp>



## 聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理

お申込先 : 〒 350-1391 埼玉県狭山郵便局私書箱 13 号「福音の宝」係  
是非お申し込み下さい。



## 書籍

【永遠の真理】 聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。



【安息日聖書教科】 は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。



イエスの物語

## 第55話

# 行って、わたしの弟子たちに 伝えなさい(1)

ルカは救い主の埋葬の記述の中で、イエスさまの十字架のときにこのお方と一緒にいた女たちについて語って言いました。「そして帰って、香料と香油とを用意した。それからおきてに従って安息日を休んだ」(ルカ 23:56)。

救い主は週の六日目の金曜日に葬られました。女たちは自分たちの主のために準備した腐敗防止のための香料と香油を、安息日が過ぎるまで取っておきました。彼女たちはイエスのお体に防腐処理を施す働きですら安息日にはしませんでした。

「さて、安息日が終わったので、……週の初めの日に、早朝、日の出のころに墓に行った」(マルコ 16:1, 2)。

彼女たちは園に近づいたときに、彼女たちは天が美しく光を放っているのを見て驚き、また自分たちの足下で地が揺れ動くのを感じました。彼女たちは墓へ急いで行きました。そして、石が転がされ、かつローマの護衛がそこにはいないのを見てさらに驚きました。



マグダラのマリヤは一番先にその場に着きました。彼女は石が取りのけられているのを見ると、弟子たちに知らせるために急いで立ち去りました。それからほかの女たちが来て、彼ら

(43 ページに続く)